

令和3年度 学校評価書（最終評価）

スローガン 「人・もの・未来をつくる。」～CoCoLo（こころ）の教育～
CoCoLo（こころ）の教育=Communication×Collaboration×Logical thinking

評価基準 A 目標を上回った B ほぼ目標通り C 目標を下回った

玉野市立玉野商工高等学校

学校経営目標等	現状分析	今年度の達成基準	具体的計画	自己評価（中間）	自己評価（最終）	評価	総合評価	関係分掌
重点目標								
1 どのように学ぶか								
(1) CoCoLo（こころ）の鍛錬のために、新たな社会貢献活動づくり（五輪聖火リレー等）を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度コロナ禍で社会貢献活動は中止や制限がある中での活動になった。以前から社会貢献活動については、その意義深さともに持続可能な活動になるような方向付けが求められている。今年度は、地域文化理解力の育成とともに、カリキュラム内での活動を計画していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 聖火リレー、港フェスティバルの参画を通じて、生徒が地域と関わる意識を持てるようになる。学校自己評価アンケートの生徒質問項目「学校行事やボランティア活動において、地域と協力して、取り組むことができる」との肯定的回答が70%を超える。R2年度は62%。 	<ul style="list-style-type: none"> 開催条件にもよるが、生徒の安全を確保した上で、聖火リレー、港フェスティバルに参画する。文化委員会を通じて、生徒の主体的な活動となるように計画する。 	<ul style="list-style-type: none"> 聖火リレー、港フェスティバルも中止となった。現在、実施済みのボランティアは2件のみで延べ参加者は32名。11月には1件のボランティア依頼がある。今後、コロナが落ち着きボランティアが参加しやすい環境になれば、希望者中心で生徒の主体的な活動となるように計画する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校自己評価アンケートの生徒質問項目「学校行事やボランティア活動において、地域と協力して、取り組むことができる」との肯定的回答が72%であり目標としていた70%を超えている。コロナ禍の影響で生徒が主体的に活動できる場の提供には種々制限があったが、地域を学びのフィールドにした学校の取組が根づいてきたのではないかと考える。 	A		総務課
(2) CoCoLo（こころ）の鍛錬のために、小・中学校と連携した行事づくり（スマホ学習会、出前授業等）を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 玉中学校との合同スマホ学習会の開催が、一時中断している。 	<ul style="list-style-type: none"> 1、2学期をめぐり玉中学校との合同スマホ学習会の開催する。 	<ul style="list-style-type: none"> 5月中旬に、本校教員、本校生徒会、玉中学校担当者、との協議を重ねて、スマホ学習会の開催に向けて具体的な実施計画を立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 7月の地域連携協議会で高校生として中学生に伝えたいことを絞ってスマホ教室を開催するという結論に至る。コロナの状況を鑑みて今後開催できるように進めていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の2月17日に玉中学校体育館にて全校生徒にスマホ講習会を実施するめどが立っている。1月11日にスマホのアンケートを行い、アンケート調査からどのような講習会が有意義が検討していきたい。 	A		生徒指導課
(3) CoCoLo（こころ）の鍛錬のために、新規企画による「Newキッズビジネススタウンたまの」づくり（街（タウン）創造PRプログラム実施に向けて）を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 一昨年度、機械工作部の生徒が中心となり、「大工」と「ものづくり工房」ブースを運営できた。今年度は2、3年生全員が主体的に参加できるように授業の中で、キッズについて考えさせたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究や機械工作部でキッズの準備をすすめていき、ものづくりを通して創造力レベル3まで達成する。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題研究や機械工作部でキッズのノベルティ製作を行う。 5インチゲージ（軌間が5インチの乗用の鉄道模型）の製作を行い、キッズで子ども達が利用できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度のキッズビジネススタウン玉野は中止になったが、ノベルティ製作や5インチゲージ（軌間が5インチの乗用の鉄道模型）、ラジコンの製作を通してCoCoLoの教育を実施できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度のキッズビジネススタウンに向けてのノベルティ作りや5インチゲージ、ラジコン等を製作し準備を進めることができそれぞれの製作班の課題研究でのCoCoLoの教育では創造力をレベル3まで達成することができている。 	B		工業科
	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度、キッズビジネススタウンたまのが実施できなかったため、今年度は全学年がキッズビジネススタウンたまの経験がない。そのため、今年度のキッズを知ることに始めなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度は、今まで通り学校内でキッズビジネススタウンたまのを実施し、設置ブースについて新たに考えたり改良すること、で、「創造力」について3年生の評価が3.0を超える。 	<ul style="list-style-type: none"> 総合実践の授業において、設置ブースについて企画から実施まで取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 1学期にブース担当を決定し、それぞれのブースで新たな企画内容などもきめ話し合いを進めた。本年度もキッズが中止となり、話し合いまでの取り組みとなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度もキッズビジネススタウンたまのが中止となり、企画内容を話し合ったところで終わっている。そのため、評価を測定できなかった。しかし、キッズを経験していないからこそ、新しいアイデアが出ており、来年度はこれらのアイデアも合わせて考え取り組みたい。 	B		商業科
1 どのように学ぶか								
(4) CoCoLo（こころ）の鍛錬のために、GROW UPシートやCan Do Listを活用した教育活動を行う。	<ul style="list-style-type: none"> GROW UPシートの活用については理解が進んでいるが、Can Do Listについては、まだ周知がされていないため、周知からはじめる。最終的には、生徒が教育課程内の学習活動をGROW UPシート、Can Do Listにもとづいて、自分で説明や振り返りができるようにしたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校自己評価アンケートの生徒質問項目「自分の成長を振り返るために、GROW UPシートが活用できている」の肯定的回答が60%を超える。R2年度は49%、R元年度は52%。 	<ul style="list-style-type: none"> 全校集会、学年集会、2年生総合的な探究の時間等で未来手帳を活用し、GROW UPシート、Can Do Listについて説明する。生徒が自分自身で趣意説明や振り返りができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 1学期末の終業式（映像配信形式）でCoCoLoの教育とGROW UPシートについて説明した。GROW UPシートの活用は、学校自己評価の結果から昨年度より肯定群は6.0%下がっているが、指数は0.2ポイント上昇している。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校自己評価アンケートの生徒質問項目「自分の成長を振り返るために、GROW UPシートが活用できている」の肯定的回答が59%であり、目標の60%にはわずかに届かなかったがほぼ目標を達成できたといえる。CoCoLoの教育ルーブリック表を活用したパフォーマンス評価が定着してきたのではないかと考える。 	B		総務課
	<ul style="list-style-type: none"> GROW UPシートは、昨年度コロナ禍で学校行事がなくなり、また活用に向けてのPRもなかったため、あまり活用されていない。 Can Do Listの活用は、今年度からの取組である。 	<ul style="list-style-type: none"> GROW UPシートを年間2回以上活用した人数の割合が70%以上となる。 Can Do Listのstage1「学習のスタンダード」ができている（肯定的回答）の割合が70%以上となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 各授業でGROW UPシートを活用できるようにシートを準備する。 9月中旬でアンケートを行い、状況に応じて活用を促す。 集会や教室掲示などで「学習のスタンダード」ができるよう促す。 9月中旬で生徒にアンケートを実施し、その結果をもとに、対策を考え喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> GROW UPシートの活用は、学校自己評価の結果から昨年度より肯定群は6.0%下がっているが、指数は0.2ポイント上昇している。後半に向けて活用を促していきたい。 学習のスタンダードについては、アンケートの結果から全項目とも肯定群は70%を超えている。後半に向けて、『できている』の割合がさらに上昇するよう全教員に投げかけを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> GROW UPシートシートの活用は、学校自己評価の結果から肯定群は61.4%と目標にはわずかに及ばなかったが、昨年度より肯定群は10.3%、指数も0.29ポイント上昇し、少しずつ浸透し始めている。来年度は、授業でももっと活用されるように呼びかける。 学習のスタンダードについては、アンケートの結果から全項目とも肯定群は70%を超えている。来年度は、『できている』の割合がさらに上昇するように呼びかける。 	B		教務課
	<ul style="list-style-type: none"> 令和2年度は交通自治委員会による交通立ち番は実施していない。 令和2年度の交通事故報告件数は11件であった。 令和2年度の二重ロック実施率は92%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 交通自治委員会による交通安全啓発活動（交通立ち番等）が実施される。 令和3年度の交通事故報告件数が10件未満となる。 令和3年度の二重ロック実施率が95%以上となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 交通自治委員会による交通安全啓発活動（交通立ち番等）を実施する。 交通自治委員会による二重ロックの点検を行う。 交通安全啓発のため、交通HRを実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 10月15日（金）までの交通事故報告件数は5件であった。 交通自治委員会により継続的に二重ロックの点検が行われており、9月16日集計の二重ロック実施率は96.7%であった。引き続き交通事故防止のための啓発活動、二重ロックの点検を継続していく。 	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全委員会による交通安全啓発活動は、各学年の委員が交通安全啓発ポスターをつくり交通安全について啓発している。 交通事故報告件数は5件であり、年度末に向け交通安全について更なる呼びかけをする。 二重ロックについて、多くの生徒が取り組んでおり、自転車の盗難件数は0件であり、目標の95%は達成できている。 	B		生徒指導課
	<ul style="list-style-type: none"> 3年間を見通した進路計画をもとに進路の具体的な活動を行っている。しかし、生徒が進路希望を絞り込み、希望を決定するまでのタイミングが3年生にずれ込む状況もみられる。一人一人の生徒が進路希望を決定してから、進路の具体的な準備を早めることが求められる現状がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生が、3学期にある程度の進路の方向性を見出し、さらに2年生の2学期開始までに進路希望の決定ができる。そして、2学期以降より具体的な進路活動や学習を進めることができる。 保護者対象の進路説明会を1年生、2年生においても実施し、最新の進路情報や本校の現状を伝える機会を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> 3年間を見通した進路計画をすることで、一定期間ごとの具体的な目標を明確にし、定期調査や特別時間割期間に進路LHRの時間を確保し、進路活動や進路学習を行う。 時間を確保することで、計画的な進路の取り組みを行い、生徒の進路希望決定を2年生の2学期までに明確にするために、1年生や2年生においても保護者対象の進路説明会を実施する。 	<ul style="list-style-type: none"> 1,2年生の生徒、保護者向けに進学と就職についての進路説明会を動画にして、Classroomより配信した。 2年生は7月の特別時間割期間にリモートにより進路別ガイダンスをあらたに実施した。 3年生においては、対面での進路ガイダンスを予定していたが、中止となった。 	<ul style="list-style-type: none"> クラスルームを通して、リモートでの進路説明会動画配信は、保護者の都合の良いタイミングで一定期間視聴が繰り返し可能である。その後、保護者からの問い合わせについては、生徒のスマートフォンを通じてそのやり取りは可能である。 リモート形式でのデメリットを埋めるため、生徒、保護者に対して様々な進路資料に加え、本校独自の進路資料としての進路の手引書の改善を検討する。 	B		進路指導課
	<ul style="list-style-type: none"> Can Do Listのstageでは、現在、工業科の多くの生徒が、「各教科、各科目の学習内容を結びつけて考える習慣を身につけている」のstage3であるが「各教科、各科目の学習内容を結びつけて考え、学習活動やものづくりに生かしている」のstage4を目指していきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国工業高等学校長協会主催3級程度の取得率が80%以上であり、その知識や技術をものづくりに生かすことができる。R2年度は70%。 	<ul style="list-style-type: none"> 検定取得に向けて補習等で指導していき知識や技術を高め、また、ものづくりにどう生かしていけるかも含めて指導をしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 前期全国工業高等学校長協会主催3級程度の取得率（1年生基礎製図検定・2年生計算技術検定）が89%であった。後期でも1,2年生を中心に検定を実施していくため引き続き補習等で手立てを講じていく。そして身につけた知識技術をものづくりに生かしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 全国工業高等学校長協会主催3級程度の取得率が73%である。検定の種類や難易度によって取得率が大きく異なっている。その点を十分に考慮して補習等を講じていく必要がある。 	B		工業科
	<ul style="list-style-type: none"> GROW UPシートについては、昨年度までも活用しており「人間関係形成力」の項目については一定の伸びを示しており、今年度も有効に活用していく。 Can Do Listについては、今年度からの取組であるため、まずは教員、生徒ともに内容を周知して意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> Can Do Listにおいて、1年生ではstage2、2年生ではstage4、3年生ではstage3をそれぞれ70%以上の生徒が達成できる。 	<ul style="list-style-type: none"> 未来手帳にCan Do Listを貼り、内容を周知して、各学年での授業や検定における学習目標を考えさせる。 各学期で、自分の達成度などを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 現在取組中である。 	<ul style="list-style-type: none"> Can Do Listの内容を周知を徹底することができていない。来年度へ向け、具体的に取組む手立てを再度考えていく必要がある。 	C		商業科

1 どのように学ぶか								
(9) 学びに向かう姿勢を養うために、4E「探究(Explore)・交流(Exchange)・表現(Express)・振り返り(Evaluate)」授業モデルの導入を行う。	各授業において学びに向かう姿勢を養う取組を行っている。	英語を使って交流したり表現したりすることを通して、英語を使うこと(話すこと、書くこと)への前向きな態度を身に付ける。 授業でのノート、プリントの課題に積極的に取り組み、70%以上の生徒が期限内に提出できている。	各授業において、単元につながる活動や表現する活動などを効果的に取り入れる。	コロナ禍において生徒同士で交流する活動は制限しているが、単語の発音やコーラスリーディングには積極的に取り組んでいる。 課題への取り組み方は、生徒の70%以上が概ね満足できる状態にある。	コロナ禍において生徒同士で交流する活動は制限が続いているが、単語の発音やコーラスリーディングには多くの生徒が積極的に取り組んでいる。 課題への取り組み方は、生徒の70%以上が概ね満足できる状態を保っている。	B	英語科	
	8割の生徒は教科書等の忘れ物がなく、授業を受けることができる。促すと板書することができる。	授業プリントやノートチェックで、空欄がなく書かれている。また板書事項が記入できている生徒が80%以上いることを達成基準とする。	本時の目標を明確にノートに記入させて、授業の終わりに5分前には本時のまとめをする。Surfaceを使用して、授業内容をわかりやすく伝える。	Chromebookを使用して、DVD動画や資料提示などを用いて、ビジュアルに訴える授業を展開するように心がけている。	Chromebookを活用して、パワーポイント資料等でビジュアルに訴えながら理解を深めるように授業展開している。またコロナ禍のため、被服、食物を半々に分けて、密を避けるようにして実施している。調理実習は2人1台を使用して行い、一時間でつくって食べるため、真剣に取り組んでいる。	A	A	家庭科
	各授業においてレポートや振り返り用紙等で学びに向かう姿勢を養う取組を行っている。	各学年の実習においてレポートで必ず4Eを取り入れた授業モデルの導入を行う。	各実習において4Eを取り入れたレポートを実践していく。	各学年の実習において4Eを取り入れたレポート作成を実施している。	各学年の実習において4Eを取り入れたレポート作成を実施できている。また、各実習担当教員の方で適切な指導助言ができています。	B	B	工業科
	各科目において、なぜこうなるのかを考えたり、お互いに教え合うことや、小テストなどでの振り返りを行っている。	各科目において、4Eを意識して学びに向かう姿勢を養う。	各科目において、答えを探る過程で、意見を交換したり、問題の答えを記述や発表で表現し、小テストや課題を用いて振り返りを行う。	各科目において、授業を通して取組中である。	各学年の各科目において、自ら調べ課題や問題に取り組んだり、可能な時には、グループやペアで話し合ったり、教えあう活動を行ったり、さまざまな形で小テストや振り返りなどをおおむね実施できている。	B	B	商業科
(10) 学びに向かう姿勢を養うために、未来手帳の活用(自己成長のマネジメント)を推進する。	未来手帳の活用が十分にできていない。	7割以上の生徒が、未来手帳の積極的な活用ができています。	年度当初、1年生は数日間かけて、行事予定を未来手帳へ書き写させる。 SHRや授業、集会などあらゆる場面で未来手帳の活用を促す。	第1回学校生活アンケート(7月)において、「日々の予定を毎日見直している」の肯定的回答が75%、「予定を意識して行動している」の肯定的回答が88%であった。毎朝のSHR、終礼で手帳を開き、予定、提出物を確認することを徹底しきれていないことが考えられる。根気強く指導をしていくことが必要である。	B	B	生徒指導課	
2 実施するために何が必要か								
(1) 連携・協働を支えるICT環境の整備・活用(Chromebook、デジタルサイネージ等)を行う。	コロナ禍でICT環境の整備が急速に進んでいる。デジタルサイネージ、Google Workspace for Education、アイデアハブ、WiFi環境が昨年度整備された。今年度は、Chromebookが1年生での導入となる。Chromebookの活用方法について重点的に取り組んでいく。	Chromebookの活用に関する先生方対象の研修、GIGAスクール推進委員会からのお知らせ等によって、Chromebookの活用が進む。	Chromebookの活用方法について、各教科、各課室、各学年の先生方にアンケートを年度当初に実施する。Chromebookの活用に関する先生方対象の研修を年2回実施する。GIGAスクール推進委員会を原則週1回開催し、ICT環境の整備活用について協議を重ねる。	Chromebookの活用方法について年度当初にアンケートを実施して希望を調査した。5回の研修会を開催した。GIGAスクール推進委員会を10回開催しながらGIGA環境の有効活用について情報共有している。	学校自己評価アンケートの教職員質問項目「授業でChromebookを活用するなど、ICT機器を積極的に活用している」の肯定的回答が88%である。これはChromebookの活用に関する7回の教員研修、GIGAスクール推進委員会からの種々の情報提供によって、教員の活用を後押ししてきたのではないかと考える。反対に12%が活用できていないとすれば、まさにデジタルデハイトと言えるためこの点は留意しておきたい。	A	総務課	
	新教育課程も見通した環境整備や企業との連携を工業科では会議等で検討している。	電気電子実習室と造形実習室のPC環境の整備が完了する。	工業科の教員間と総務課等と連携を取りながらPC環境の整備を進めていく。	電気電子実習室のPC関係の環境整備は概ね完了した。造形実習室のPC環境等の整備を実施する予定。	電気電子実習室のPC関係の環境整備が完了し、造形実習室のPC環境等の整備を進めている。	B	B	工業科
	新教育課程に向け、教室や機器の環境整備と企業との連携を計画している。	第1および第2コンピュータ室と総合実践室の更新および機器の導入が完了し、活用に向けて考える。 「ビジネス実習」の内容を確定し、連携企業との話し合いを行う。	科会議などを通して、コンピュータ教室の更新へ向け必要な環境整備について話し合う。 「ビジネス実習」の内容と連携企業について、商業科長を中心に、チームを作り検討を進める。	科会議などを通して、第1,第2コンピュータ室の更新とレイアウトの変更について、総合実践室のPC導入と活用について、話し合いを進めている。	第1, 第2コンピュータ室の更新とレイアウトの変更、総合実践室のPCおよび周辺機器の導入と活用へ向けての研修を行っている。 ビジネス実習の内容については、現場実習での試行などを踏まえ、来年度へ向けて本格的に内容を確定していく予定である。	B	B	商業科
	従来から2年生で実施しているインターンシップは、令和4年度までとなっている。従来の形での企業連携は形を変え、令和4年度からの新教育課程に移行し、1年生から新たな取り組みが始まる予定である。インターンシップに代わる企業連携を商業科や機械科と組織的に進めることがこれから求められる。 昨年度、コロナ禍で実施できなかったインターンシップの代替行事として、職業インタビューを急遽計画し、63期生で実施した。	今年度もコロナ禍による影響がなければ、インターンシップを総合的な探究の時間委員会の詳細な実施計画のもとに2年団を中心に実施する。 インターンシップを実施できない場合には、SDG'sについて取り組んだ昨年度と同様にテーマを設定し、探究活動を通して企業との連携を模索しながら取り組む。最終的に職業インタビューを実施し、探究活動のまとめとする。	玉野市産官学連携地域人材育成推進協議会は、玉野市商工観光課が学校と企業との間でインターンシップ事業を実施するため、本校の企業連携にとって重要な役割を担っている。この協議会において、今後の令和4年度からの新教育課程で導入する新たな企業連携の在り方を模索するためにも学校として具体的な計画案を今年度提示し、協議会において様々なご意見をいただき、より内容を深めるように進める。	2年生においてインターンシップを実施できたことは、このコロナ禍の中でありがたいことであった。 2年生において、企業と連携した進路行事を3月実施に向けて、具体的に計画を立案する。	64期生が例年通りインターンシップを実施でき、生徒一人一人が貴重な経験ができたことは、来年度の進路指導に向けて大きな意義がある。 2年生において、企業と連携した取り組みとして「座談会」を計画し、実施に向けて準備をしている。その内容は、若手の先輩社員との座談会の計画について、学校運営協議会という機会が行事の内容についての工夫や企業側の理解を得るなど実施へのプラスになったことは、有意義なことである。	B	B	進路指導課
(3) 学校運営協議会の深化を行う。	令和3年の3月には、学校運営協議会の発表会(校内ライブ中継)が実施できた。校内では、学校運営協議会への生徒と教職員の参画が進んでいる。今年度は、令和4年度からの教育課程の実施を見据え、生徒と教職員の参画をさらに進めたい。	学校自己評価アンケートの教職員質問項目「学校運営協議会に主体的に関わる事ができている」の肯定的回答が60%を超える。R2年度は54%。生徒質問項目「授業の中で地域の課題について考えることができています」の肯定的回答が60%を超える。R2年度は55%、令和元年度は37%。	学校運営協議会の各WGメンバーの先生方の役割が年々具体的になってきている。各WGの先生方に授業、委員会、生徒会等関係する令和4年度以降の教育課程内での学習活動と今年度の試行的な学習活動を結びつけて計画していただくようにしていく。今年度も学校運営協議会の成果を共有できるように年度末には発表会を行う。	学校自己評価アンケートの教職員質問項目「学校運営協議会に主体的に関わる事ができている」の肯定的回答が64%であり、目標の60%を超えている。肯定的回答が71%であり目標の60%を超えている。学校運営協議会の協議内容を教育課程内に明確に位置づけながら、生徒を真ん中に置いた教育活動の展開が根ざしつつあるように考える。	A	A	総務課	
(4) 戦略的広報の推進(中学校へのアンケート調査、全教職員の参画等)を行う。	例年、①中学校主催の学校説明会、②スクールガイド、③学校PRポスター、④クリアファイル、⑤出前講座、⑥感謝の手紙、⑦オープンスクール、⑧学校説明会、⑨マスコミへの情報発信、⑩本校HPによる情報発信等が戦略的広報活動にあたる。昨年度実施した、玉野商工高等学校魅力化アンケートを分析し、今年度の計画を考える。玉野商工高校魅力化アンケートによると、中学生に行ったアンケートの質問項目「玉野商工の印象について」では、1174人の中学生の内68人(57%)が「どちらともいえない、分からない」と答えている。広く中学生に本校の存在を知ってもらう事から始めたい。	高校入試の志願者数が昨年度を上回る。令和2年度はビジネス情報科79名、機械科33名であった。	玉野商工高校魅力化アンケートを改善しながら実施して、データを収集する。2回のオープンスクール・学校説明会、出前講座、中学校主催学校説明会の機会を有効に活用し、生徒と教職員が参画し、玉野商工高校の魅力を中学生にとどける。	第1回オープンスクールの参加者は142名。第1回の学校説明会(オンライン)の参加者は12名であった。出前授業や学校説明会、広報たまたま、マスコミへの取材依頼などで魅力発信に努めている。	C	C	総務課	

3 生徒にどのように支援するか							
(1)「地域文化理解力・創造力」の育成を目指した授業づくりを行う。	・3年生ビジネス情報科の生徒の選択科目である、国語表現の授業で「地域文化理解力」少し扱うのみだった。	・他学年も含めて、玉野市が主催している「西行賞」で短歌を作って応募したり、山陽新聞の「ちまた」欄などへの投稿など各学年で年1回行う。	・夏休みの課題として出し、少しでも時間を工夫して作るようにする。	・夏休みの課題としては出していないが、今後の授業で扱う予定である。今年度の西行賞の案内はまだ来ていない。	・各学年で行うことができ、大勢の生徒が取り組んでいる。	A	国語科
	・地域文化理解力については公民科で実施しているが、創造力については実施できていない。	・地域文化理解力、創造力のルーブリック評価を意識して授業単元の前後でアンケートをとる。計画は公民科の3学期で行う。ルーブリック3以上が60%を超えることを目指す。	・主権者LHRとの連携を計画し、玉野市の課題解決学習を3学期に実施できるよう、年間を通して学びを深めていく。	・コロナ禍でディベート活動は一時中止しているが、できることを模索していく。	・年間を通じての玉野市の課題解決学習は実施できなかつたが、授業内での意見交換やニュース情報交換、意見交流など創造力を育む授業展開に取り組むことができた。年度末の授業評価を待ちたい。	B	歴史公民科
	・授業工夫は各個人で行っているが、地域の題材を取り入れる授業はなかなか行えていない。	・地域の問題を題材にすることで地域と数学が身近に感じられるようになる。 ・アンケートを実施して、肯定的回答が60%を超えている。	・各章で1回以上地域の題材を取り入れた出題解説等を実施する。 ・グループ（ペア）ワーク、学び合い、または教え合いをする。	・玉野市のデータを分析をしたり、玉野市の企業のロゴマークから対称性や角度など図形の性質について考えさせたりすることを考えている。	・2年生数学Ⅰの「データの分析」での、玉野の企業「おもちゃ王国」の月別来場者数のデータの分析をおこなっている。	B	数学科
	・地域の題材を取り上げた授業の実践はできていない。	・自分たちが住んでいる町に、昔から育んでいる産業があることに気づき関心を持つようになる。肯定的回答が50%以上になる。	・「塩づくりの里 山田」や「ナイカイ塩業」など瀬戸内海に面していて気候のよい玉野市は昔から塩作りが盛んであったことなどを資料を用いて取り入れていく。	・地域文化に直接触れることはできていないが、インターネットを利用して調べ学習に取り組んでいる。	・銅の製錬について、三菱マテリアル直島精錬所の動画を視聴させることにより、地域の産業に関心を高めることができています。また、瀬戸内海沿岸地域の気候を利用した塩作りを調べ学習に取り入れている。	B	理科
	・創造力を伸ばす授業づくりは、まだまだ実施方法を検討する必要がある。	・授業ノートやグループノートを活用し、自分たちでよりよく授業を展開していくことができる。 ・アンケートを実施し、肯定的回答が80%を超えている。	・体育では、グループ活動で生徒達自身が、施設の条件等を考慮し、ルールを工夫しながら活動を計画実施できるよう指導助言する。	・コロナ禍で制限の中、生徒同士を含め工夫しながら取り組んでいる。	・現状の施設等を考慮しながら、グループ活動並びに個人の活動も取り組んでいる。	B	保健体育科
	・地域文化理解力を育む授業づくりを行っている。創造力の育成を目指した授業づくりは不十分である。	・地域文化理解力、創造力の育成を目指した授業を行い、アンケートで満足度が70%を超えている。	・地域について知り、クラスメイトとアイデアを交わし合うことで理解を深められるような活動を年に1回以上実施する。	・単元に関連し、かつ地域文化理解力を育むことができる動画を授業で見せたいと考えている。スピーチ原稿の作成と発表を授業で行いたいと考えている。	・題材への理解を深める視聴覚教材（動画など）を効果的に用いることができている。 ・スピーチ（原稿作成と発表）をおこなうことができている。	B	英語科
	・地域文化理解力については食文化などで触れる程度である。	・日本と世界との比較だけではなく、生徒に身近な玉野市から岡山県も意識して、食文化、服飾文化、住文化を理解することができる。	・地域文化理解力については、食文化など玉野市で栽培している食材などを調べて授業に取り入れていく。	・調理実習に玉野名物温たま飯と野菜の具だくさんスープ、玉野市番田産紫いもを使用したカップケーキの実習を実施したい。	・調理実習に玉野名物 温たま飯と野菜の具だくさんスープ、玉野市番田産紫いもを使用したカップケーキの実習を実施することができている。生産者のもとを訪ねて、紫いもの開発に至る歴史について学んで生徒に説明している。	A	家庭科
	・授業の中で地域文化理解力、創造力を育む手立てを各教科で行っていく必要がある。	・地域文化理解力と創造力はともにレベル3の行動や考え方ができるように授業展開を行っていく。	・地域の産業と結びつけた授業展開や実習を行っていく。 ・三井E&S、宮原製作所等と連携し力を育んでいく。	・三井E&S、宮原製作所の実習において地域の産業と結びつけた授業展開や実習を実施できている。	・地域の産業と結びつけた授業展開や実習を行い、三井E&S、宮原製作所等と連携し、地域文化理解力を実習の授業において伸ばすことができている。	B	工業科
・昨年度は授業に地域についての話題やデータを取り入れることを目標とした。科目の特性により最終評価の時期には間に合わなかった科目もあるが、授業評価アンケートでは、「地域について知っていることが増えた」という回答が92%であった。	・地域について知ることは、ルーブリックのレベル2にあたるので、今年度はレベル3を目指し、特に3年生の「地域文化理解力」が平均で3.0以上となる。 ・キッズビジネスタウンたまのや課題研究の取り組みを通して「創造力」において平均3.0以上となる。	・各科目において、地域について知ることに加え、それを他者に伝えられるような考察を行うことでルーブリックレベル3を目指す。 ・キッズビジネスタウンたまのや課題研究において、自分のアイデアや意見を表し、話し合いや活動ができるように取り組む。	・2年「マーケティング」において、地域経済などについて取り組みを行っている。他の科目においても、随時地域に関する内容について、取り入れるようにする。	・今年度は2学期半ばまで地域に実際に出て活動することができなかったため、3年生の課題研究についても、校内での調査研究活動などが長く、実際に地域に出ての活動は短期間で行っている。その中でも生徒はそれぞれの講座で地域について調べたり、企画や制作などに取り組んでいる。回収できているルーブリックの集計では、3年生の「地域文化理解力」が平均で3.4となり、「創造力」が平均3.1となっている。	B	商業科	
3 生徒にどのように支援するか							
(2)わかる授業の実践（個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業づくり）を行う。	・これまでICTを使用する、ノートを取りやすくするためにプリントを作る等を行ってきた。	・これからは、Chromebookを使う学年もあり、ICT機器を活用しやすくなっている。それらを利用し、赤点を取る生徒が前年度と比較して減少する。	・これからはChromebookを使い、画面共有などができ、学習支援も行いやすくなる。2、3年生でもこれまで通り、学期に2回を目安にICT機器などを使用し、生徒に分かりやすく伝える。	・1年生では、Chromebookを何度も授業で活用して、生徒の興味を喚起することが出来た。2,3年生でも目標の回数はこなすことが出来た。	・Chromebookなど、ICT機器を使って授業をすることはできている。視覚的に説明しやすかったり、生徒の視線を惹きつけやすいという利点があるが、生徒が板書より見にくい、次の場面に行くと、前の物が書けない事になるなどの改善を必要とする事もある。	A	国語科
	・授業の流れを掲示し、まとめを行うよう努めている。	・個別的な取り組みと、協働して学ぶ活動を授業のなかに組み込み、達成感のある主体的な学びを計画する。授業アンケートの肯定的評価が70%を超えている。	・授業ルーティーンを確実に実施し、個別の学習、協働学習を取り入れて授業に取り組む。特に1年生地理ではChromebookの活用を通して個別学習、協働学習の効果的な方法を探求する。	・特に地理の授業ではChromebookを活用しての授業ルーティーンの確率、協働学習に取り組んでいる。今後も継続していく。	・特に地理の授業ではChromebookを活用して授業ルーティーンを確実に実施し、個別の学習、協働学習を取り入れて授業に取り組むことができています。最終授業評価を待ちたい。	B	歴史公民科
	・授業工夫は各個人で行っているが、GROW UPシートを取り入れ活用する授業を行えていない。	・昨年度に引き続き、数学科授業4（フォー）を実施することにより、主体的、対話的で深い学びができ、「できた」「解けた」「分かった」と感じることが出来る。 ・アンケートを実施して、肯定的回答が60%を超えている。	・授業で、次の①～④のうち1つ以上実施することを目指す。 (数学科授業4) ①グループ（ペア）ワーク、学び合い、または教え合いをさせる。 ②数式だけではなく、ICT機器の利用または図を使って示す。 ③日常で使われている数学を紹介する。 ④「なぜ」「どうして」の質問を投げかけ、説明させる。	・現在のコロナウイルス関連の状況下でグループワーク等の活動に踏み込めてはいないが、環境が整えば取り組みたい。日常に使われている数学だけではなく、数学のトピックス全般についても折に触れて紹介していきたい。最近の話題としては、「柏原予想」を証明し、「フレイクスルー賞」を受賞した京大・望月拓郎教授を紹介した。	・日常で使われている数学を紹介する場面があまり持っていない。しかし、話題として、今年度「柏原予想」を証明し、フレイクスルー賞を受賞した京大数理解析研究所、望月拓郎教授、そして「abc予想」を証明し、ついでに「フェルマー予想」の史上2番目となる別証明もしたと話題を呼んだ同じ京大数理解析研究所、望月新一教授を紹介している。日本人が、何十年も世界の誰も成し遂げなかったことを次々に成し遂げる様を紹介することで、今起こっていることに少しでも触れてくれたらと思っている。	B	数学科
	・科学に対してアレルギーを持っているため、意欲的に授業に取り組む姿勢が乏しい。	・科学に興味を持ちインターネットや図書館の資料を用いて調べ学習に取り組む。年度当初より科学が好きになる回答が30%以上増加する。	・教科書に準拠しながら授業を進めていくが、答えを直接求めるのではなく質問を細分化したり実験実習を取り入れることにより取り組みやすくするなどの工夫をしていく。	・Chromebookを用いることにより、教科書の内容はもろるんパワーポイントにより写真での視覚からの理解が得やすくなった。	・Chromebookを用いることにより、教科書の内容について説明しやすくなっている。特に、写真や図の説明にとっても役に立っている。また、授業用プリントを作成することにより細分化して理解できるよう工夫している。	B	理科
	・昨年度の授業評価アンケートでは、あなたは「わかった」「できた」という実感がもてたかの肯定的回答は98.2%であった。	・アンケートを実施し、「わかった」「できた」という実感がもてた肯定的回答が95%以上を維持している。	・グループ活動でICT機器やGoogle Workspace for Educationを活用し、技術や戦術を視覚的に確認する環境、時間を確保する。 ・グループ活動を通して相互評価を行うなど、各自の変化を振り返り共有する場面を設定する。	・制限下の中、クラスルームを活用したり、振り返りを共有しながら取り組んでいる。	・グループノートの活用、個人ノートの活用できている。また、2年生においては毎時間、Chromebookを活用して内容確認等できている。	B	保健体育科

3 生徒にどのように支援するか							
(2)わかる授業の実践(個別最適な学びと協働的な学びを取り入れた授業づくり)を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度の授業評価アンケートでは授業について「良かった」「できた」との肯定的回答が80%ほどであった。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業で「良かった」「できた」という実感が持てるようになる。アンケートの肯定的回答が80%を超えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 協働的な学びをするために、間違いを認め合い受容的に学び合うことができる雰囲気をつくり授業づくりを行う。 Chromebookの辞書アプリを使って自学ができるように支援する。 Lessonの内容理解に役立つ背景知識などをICT機器も有効に活用し、わかる授業の実践を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 1年生にChromebookの辞書アプリの使い方を指導した。スライドや動画などの視覚教材を効果的に使い、内容理解が深まるよう工夫している。 	<ul style="list-style-type: none"> Chromebookの辞書アプリを家庭学習で主に使用した。今後は授業内での効果的な使用につなげたい。 わかる授業をするために、スライドや動画と板書を適切に併用するなどの工夫をしている。 	B	英語科 家庭科 工業科 商業科
	<ul style="list-style-type: none"> 食文化、保育、被服分野で体験的な学習を取り入れている。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習等の体験的な学習を意欲的に取り組むことができ、さらに周りのクラスメイトを助けることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習内容を動画等を用いて具体的に分かりやすく生徒に伝える。お互いに助け合い、学び合う授業展開を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 被服実習等では、最初に実習をした生徒が後に実習をする生徒に教えるという共助の体験をさせることにより、実習内容を深め、コミュニケーション能力を高めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 調理、被服実習では従来の1班5人で行わず、2人1班でお互いを相互評価しながら実習を行っている。これにより、まず、実習をやらないう生徒がいなくなり、集中して取り組めるようになっている。 	A	
	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度の学校自己評価アンケート、S-17「先生はわかりやすい授業になるように工夫している」で肯定的回答が3年生82.1%、2年生75.7%、1年生89.7%で3学年の平均は81.9%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校自己評価アンケートで「先生はわかりやすい授業になるように工夫している」で肯定的回答を各学年で80%を超える。 	<ul style="list-style-type: none"> 視覚的に理解しやすい授業展開を行っていく。また、Chromebookの活用方法についても工業科内で検討していきICT機器を用いてわかる授業の実践を行っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 技能検定の過去問題集をChromebookで使用できるForm形式で作成し、生徒が手軽に問題が解けるようなシステム作りを行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 機械科教員研修でChromebookの活用事例について交流し、それぞれの授業で取り入れて活用することができている。学校自己評価アンケートで「先生はわかりやすい授業になるように工夫している」で肯定的回答が1年生72%、2年生95%、3年生91%である。 	B	
	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の学力や理解力にも差があり、授業内容や進むスピードなども、各科目担当者が工夫する必要がある。 コロナ禍でグループ学習の方法を検討する必要がある。 授業評価アンケートの「あなたは授業で「良かった」「できた」という実感が持てましたか」の項目で、4または3の、肯定的回答が87%となった。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材提示装置やPC、1年生ではChromebookを有効に活用して、授業内容がわかりやすくなる工夫をする。 授業評価アンケートの「あなたは授業で「良かった」「できた」という実感が持てましたか」の項目で、4または3の、肯定的回答が90%を超える。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員間の授業見学や情報交換を行い、授業の進め方や、Chromebookの活用事例などを相互に学ぶ。 生徒がわかると感ずることができるような教材や課題の工夫を行う。 授業に協働的な学びの場面を活用する工夫を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、現在までなかなかグループワークや教え合いなどの活動ができていない。 また、1年生の「簿記」において、Chromebookを活用して事前学習や授業の復習などに活用している。今後さらに活用方法について取り組みを探りたい。 3年生のビジネス経済応用では、Classroomで事前学習の教材を配信するなどの取り組みを行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 教材提示装置やPCなどを活用し、視覚的にわかりやすい教材の工夫など、複数の教科で見られる。GoogleWorkspacesのClassroomの活用についてはさまざまな工夫や活用方法が周知され教員のスキルも蓄積されてきたため、各科目で活用されている。しかし、1年生のChromebookの活用について、今後も工夫した取り組みや、活用方法の研究が必要であると感じる。 	B	
(3)個々の生徒への支援計画と実施(特別支援教育の実践力向上)を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度の学校自己評価アンケート結果では「個別の指導計画を活用し生徒指導に役立てる」の肯定的意見が5%であった。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校自己評価アンケート項目「個別の指導計画を活用し生徒指導に役立てる」の肯定的意見を70%以上にする。 	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師による講演会を年1回以上実施する。ビデオ撮影し欠席者に対していつでも視聴できるようにする。 毎月相談室で情報交換をおこない、各学年に情報提供を行う。 支援が必要な生徒の「夢宣言」を確認し目標設定について助言を行う。 特別支援教育だよりを毎月発行する。 	<ul style="list-style-type: none"> 講演会は実施することができたがビデオ撮影はできなかった。 相談室の情報交換は1学期でできなかったため、2学期以降はおこなう。 夢宣言の1学期の評価と2学期の目標を面接週間に検討してもらうように連絡できた。有効活用できるような仕組みを考えていきたい。 特別支援教育だよりも継続して発行したい。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校自己評価アンケート項目「個別の指導計画を活用し生徒指導に役立てる」の教員からの肯定的意見80%を超えることができています。生徒に対しては昨年度と同じ半数程度、保護者に対しては30%が分からないと回答がある。来年度に向けて生徒や保護者に対して夢宣言を学校生活に活用できるように考えていきたい。 	B	教育相談室
(4)いじめ防止推進の取組(積極的な生徒指導)を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 人間関係のトラブル、迷惑行為が数件あった。 SNSでのトラブルが発生している。 いじめアンケートの実施は、年3回行っている。(昨年度、3学期未実施) 	<ul style="list-style-type: none"> 「ひとに優しく、自分に厳しく」の意識を持ち、穏やかな学校生活を送ることが出来る。 「困ったときに相談できる相手が、学校内にいる。」が90%以上となる。 「思いやりや命の尊さを大切にし、いじめは許さないという意識がある。」が90%以上となる。 	<ul style="list-style-type: none"> いじめアンケートの実施を、各学期1回行う。何かあれば、学年団と情報共有し、対応する。 全校・学年集会での呼びかけを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1回学校生活アンケートを7月に実施した。 「困ったときに相談できる相手が、学校内にいる。」の肯定的回答が93%であった。 「思いやりや命の尊さを大切にし、いじめは許さないという意識がある。」の肯定的回答が95%であった。 意識していないと答えた生徒が18名いたので、学校生活全般を通じて、仲間意識を高めるための働きかけをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 第2回学校生活アンケートを12月に実施している。 「困ったときに相談できる相手が、学校内にいる」の肯定的回答が91%である。校内外に相談できる相手がいない生徒が17名いる。 「思いやりや命の尊さを大切にし、いじめは許さないという意識がある」の肯定的回答が95%である。意識していないと答えた生徒が13名いる。引き続き学校生活全般を通じて、仲間意識を高めるための働きかけをしていきたい。 	B	生徒指導課
(5)生徒の主体性の伸長を意図した学校行事や委員会活動	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会長を中心として、生徒会が関わる学校行事を主体的に行っている。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会顧問が助言することをなるべく少なくして、生徒がどのように学校行事や委員会活動を行いたいのか意見を言って実行に移すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会執行委員会の回数を増やして意見交換を行う。行事の反省会をその日のうちに行い、反省事項や来年度に生かせることをまとめて顧問に報告する。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度の雄心祭は文化祭と体育祭を分散させて行う。生徒の意向を尊重し、生徒主体の雄心祭を開催したい。 	<ul style="list-style-type: none"> 雄心祭の分散開催はコロナ禍でやむを得ない決定である。やはり文化祭と体育祭は2日で一緒に行う方が良いと考える。来年度はコロナの状況を考え、なるべく早くに計画、周知徹底をしたい。 	B	生徒指導課
	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナの終息の目処がたたず第4波入っている。社会生活や学校生活が何時崩れるかわからないなか、継続的な衛生管理や健康管理が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍対策の周知徹底、衛生活動や免疫強化の基本になる食生活等、啓蒙活動に取り組んでいく。委員会の活動満足達成度70%以上を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ対策を意識した美化委員会による衛生に関する取り組みや、保健委員会による健康管理の取り組みを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍の中、文化祭が行われたが、保健委員会は展示をし、美化委員会は後片付け等の清掃の段取りをリーダーシップをとり行えた。クラスターが起きないように、今後も衛生管理・健康管理に取り組んでいきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本全体に第6波突入し、まだまだコロナが落ち着かず対策が続けられている。クラスターが起きないように、衛生管理、健康管理に取り組んでいる。 	B	保健厚生課